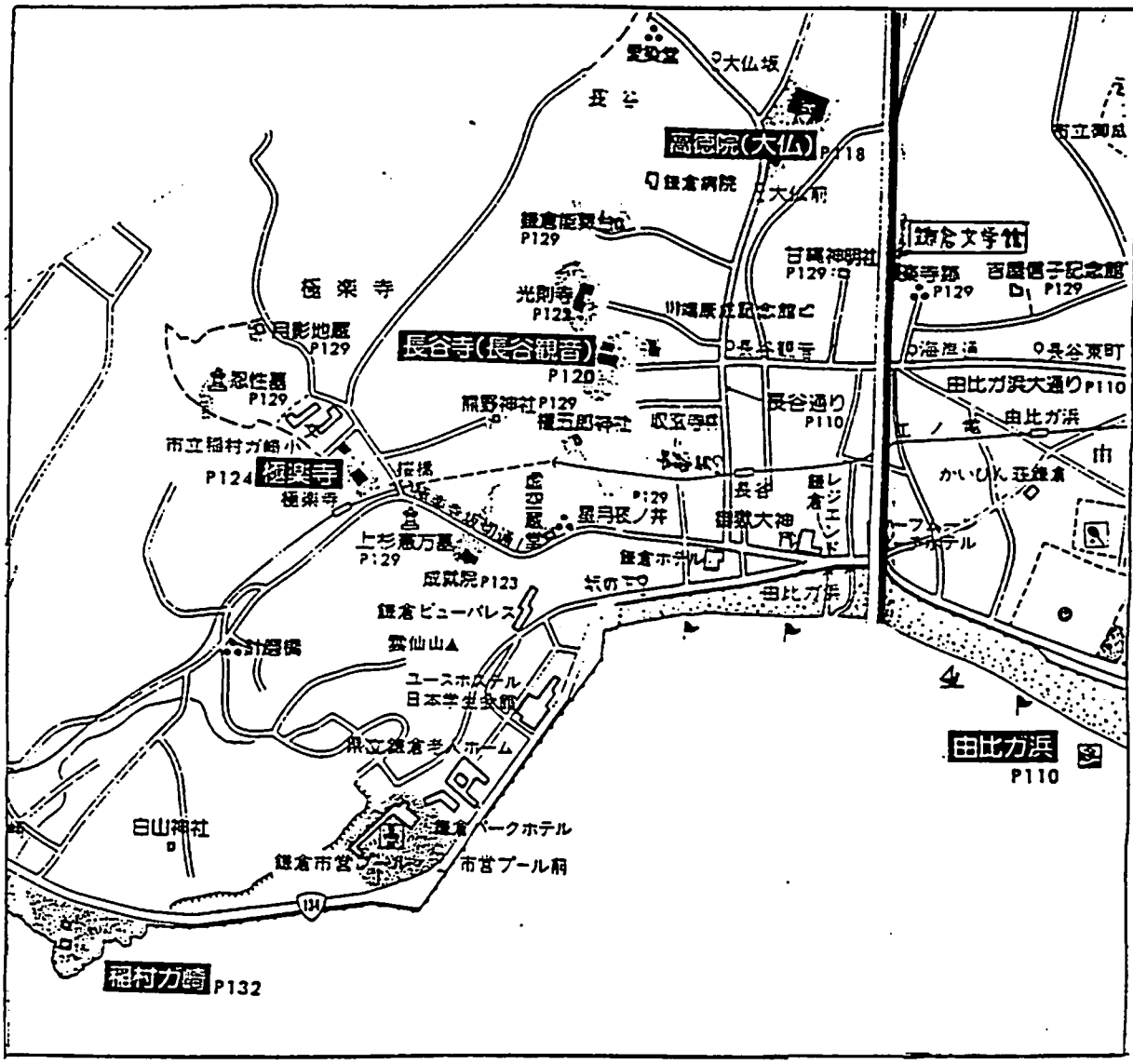
平成三年五月二六日（日）

第一八三回　史跡めぐり資料

長谷観音　鎌倉大仏　文学館

越谷市郷土研究会



◎第一八三回　史跡めぐり　ご案内

長谷観音　鎌倉大仏　文学館

とき　平成三年五月二六日（日）

集合　南越谷駅前　午前八時一五分

乗車　八時三一分

コース　南越谷駅―＜武蔵野線＞―南浦和駅―＜京浜東北線＞―東京駅―＜東海道線＞―戸塚駅―＜横須賀線＞―鎌倉駅―＜江ノ電＞―極楽寺駅…極楽寺…上杉憲方の墓…成就院…極楽寺坂…星の井…御霊神社…由比ヶ浜…長谷観音…高徳院大仏＝昼食＝甘縄神明社…鎌倉文学館…由比ヶ浜駅―＜江ノ電＞―鎌倉駅…（小町通り自由散策）…鎌倉駅―＜横須賀線＞―＃往きの反対のコースにて＃南越谷駅

参加費　四、五〇〇円

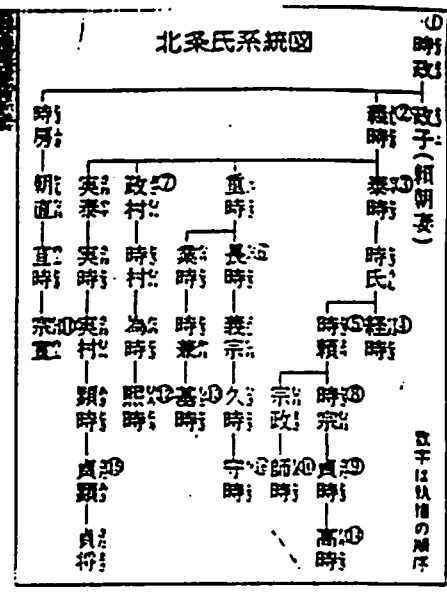
案内者　理事　宮川　進

1300

北条政子　配流中の頼朝に嫁す。頼家，実朝の母。実朝死後，幕政に携わり，尼将軍と呼ばれる。承久の乱に御家人に対して行なった名演説は吾妻鏡に詳しい。

源頼朝　以仁王の令旨に挙兵，石橋山に敗れたが，千葉・三浦氏らの援助で力を伸ばす。開幕後は義経追捕を理由に守護・地頭を置く。相模川の橋供養の帰途，落馬して死去。

北条時政　平氏に属したが頼朝を援け，幕府創設に尽す。初代執権。後妻牧の方と謀り娘婿平賀朝政を将軍にしようとして失敗，義時に追われて隠退。



1350

1252 鎌倉大仏　1264 長谷寺銅鈴
1259 極楽寺　1285 安達泰盛七

日蓮 ——— 1282

立正安国論を時頼に提出。幕府や諸宗を批判して伊豆，佐渡に流された。竜ノ口で斬首の際，刀に落雷，刑を免れたという。

1301 ——新田義貞 —— 1338

祖は源義家の孫義重。祖村が時に剣を投げ，鎌倉を攻略した話は有名。尊氏と対立，南朝方で活躍したが，北陸で転戦中，敗死。

1305 ——— 足利尊氏 ——— 1358

祖は源義家の孫義康。元弘の乱に北条高時の命で西上，反旗を翻す。建武中興第一の功臣だが，時行の乱後，離反。一時敗れるが，光明天皇を擁して室町幕府を開く。全国に安国寺利生塔建立。

1306 ——— 足利直義 ——— 1352

尊氏の弟。建武中興後，北条時行の反乱に鎌倉で護良親王を殺す。室町幕府創設に尽力したが高師直，次いで尊氏と対立，毒殺された。

1340 足利基氏 1367

初代鎌倉公方。尊氏の子。以後，持氏の反乱まで鎌倉は室町幕府の関東での中心だった。

1263 ——8代執権。蒙古来襲と対決。円覚寺創建。

北条時宗　1284

7 ——北条守時 —— 1333

14代執権。凡庸の評がある。元弘の乱で後醍醐天皇を隠岐へ配流，光厳天皇擁立。新田義貞に攻められ，自刃。

1303　北条高時　1333

名は尊治。討幕失敗後，隠岐を脱出，建武新政を果たすが，南朝樹立。

1288 ——後醍醐天皇 ——— 1339

1305　護良親王　1335

大塔宮。尊雲と称し，元弘の乱に活躍して還俗。建武中興で征夷大将軍。尊氏と対立，鎌倉へ幽閉され，殺された。

一二九六　永仁四　覚園寺再興

一三二七　嘉暦二　瑞泉寺創建

一三四九　貞和五　基氏初代鎌倉公方に

一三三三　元弘三　鎌倉幕府滅亡

一三三三　元弘二　浄妙寺竪儒

一二七四　文永十一　蒙古襲来

一二八八　弘安八　東慶寺創建

一二八五　弘安六　浄智寺創建

一二八三　弘安五　円覚寺創建

一二八二　弘安四　蒙古襲来

一二三九　正元一　極楽寺再興

〃　安国論時創建

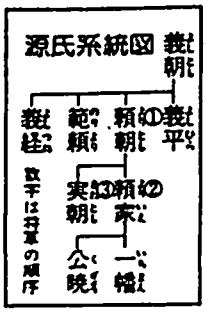
一八六九　明治二　鎌倉八幡宮社殿再建

一八二八　文政十一

一六四七　正保四　建長寺仏殿再建

一四九五　明応四　大仏殿倒壊

18 鎌倉の人物年表



1150　1200　1250

? ―― 源範頼 ―― 1193

1159 ―― 源義経 ―― 1189

1147 ―― 源頼朝 ―― 1199

1182源頼家1204

鎌倉2代将軍。将軍になった際，老臣合議制が発足，実権を縮少された。重病中に妻の実家比企一族が滅亡，子，一幡も殺された。のち修禅寺に幽閉され，暗殺された。

1118 ―― 平清盛 ―― 1181

頼朝挙兵以来の将。娘政子が頼家の子一幡を生み，外戚となる。時政の命で謀殺され，一族は滅亡した。

? ―― 比企能員 ―― 1203

1192 ―― 源実朝 ―― 1219

鎌倉3代将軍。北条氏が執権となり，権力ゼロ。歌集金槐和歌集を作り，大船で渡宋も計画。八幡宮拝賀の日，甥の公暁に殺された。

1197 ―― 幡 1203

1200 公暁 1220

三浦氏の一族。侍所の別当となる。のち北条氏と対立し，激戦の末，自刃。豪雄と謳われた朝比奈三郎の父。

1147 ―― 和田義盛 ―― 1213

1222

1164 ―― 畠山重忠 ―― 1205

鵯越の際，愛馬をかついで崖を下りたとか。子，重保が謀反の疑いで殺され，義時と戦って敗死。

1138 ―― 北条時政 ―― 1215

1157 ―― 北条政子 ―― 1225

2代執権。和田氏を倒し，畠山氏を葬る。実朝暗殺の際は病を称し，現場にいなかった。承久の乱を鎮め，幕府の力を不動のものにした。

1163 ―― 北条義時 ―― 1224

3代執権。承久の乱に上京，乱後，初代六波羅探題に。評定衆を定め，御成敗式目を制定した。

1183 ―― 北条泰時 ―― 1242

父義村は幕府創業の功臣。北条氏に継ぐ力を持ったが，北条氏に従う。泰村は承久の乱などに活躍，北条氏外戚となり，勢力を振るうが時頼に滅ぼされた。

? ―― 三浦泰村 ―― 1247

1227 ―― 北条時頼

5代執権。諸国を回り，民政をみたという最明寺入道として有名。"鉢の木"の故事も。三浦氏を倒し，執権政治を強化。建長寺創建。

安徳天皇都落ちのあと即位。長く院政を敷き，朝廷の復権を策す。承久の乱に幕府に敗れ，隠岐に流された。和歌をはじめ，多芸で知られる。

1180 ―― 後鳥羽天皇 ―― 1239

一〇六三　康平六　鶴岡八幡宮勧請

七三六　天平八　長谷寺創建

七三四　天平六　杉本寺創建

一一八八　文治四　頼朝挙兵

一一八五　文治一　平氏滅亡

一一八八　文治四　浄妙寺の前身　極楽寺創建

一一九〇　建久一　鶴岡八幡宮現在地に

一一九二　建久三　幕府開く

一二〇三　建仁三　時政執権となる

一二〇〇　正治二　鎌倉幕府創建

一二三一　承久三　承久の変

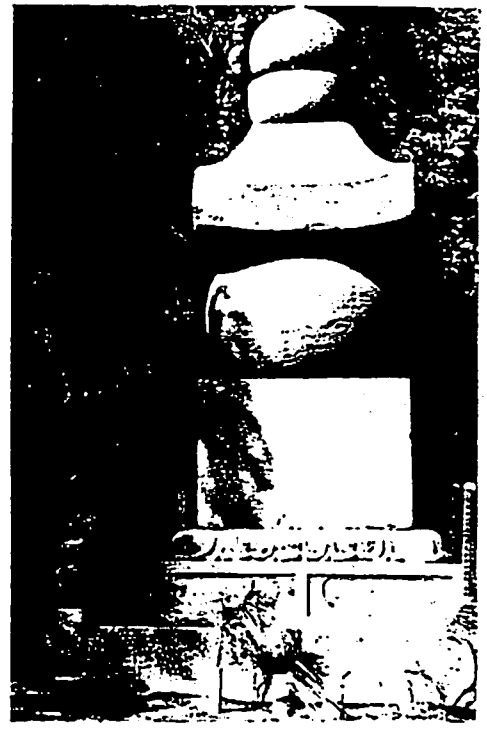
一二三二　貞永一　御成敗式目制定

一二五二　建長四　大仏鋳造

極楽寺

▶鎌倉市極楽寺3－6〈→地 p.87〉
▶横須賀線鎌倉駅江ノ電極楽寺駅下車2分

極楽寺坂をすぎると赤い橋の桜橋にでる。その下に江ノ電の線路が走っている。橋をわたって江ノ電の線路に沿って行くと極楽寺（真言律宗）がある。北条重時が地獄谷といわれていたこの地に，律宗の復興につとめて鎌倉にくだっていた忍性を迎えて1259（正元元）年に建立したといわれている。極楽寺は重時のあと子の長時，孫の業時らの協力で堂塔が完備された。最盛期には七堂伽藍をそなえ，子院49，堂塔270以上を配していたといわれ，壮大な寺院であった。極楽寺の名を世に高めたのは開山忍性の貧民救済のための社会事業の諸施設があったことである。施薬院・悲田院・施益院・療病院・薬湯院・類宿のほかに長谷の桑ヶ谷にも療病所があり，20年間に約6万人も収容されたといわれている。大伽藍をほこった極楽寺も1333（元弘3）年からつづいた兵火にあって，多くの堂塔が消滅し，現在はわずかに吉祥院の建物が極楽寺の本堂として残されている。本堂横にある宝物館には本尊の釈迦如来立像（清涼寺式）のほか，鎌倉期の十大弟子像・釈迦如来坐像・密教法具（以上国重文）などのすぐれた文化財が保存されている。本堂前には忍性にゆかりのある製薬鉢と千服茶臼がすえつけられている。一般には公開されていないが，境内裏山の稲村ヶ崎小学校グランド上には忍性墓（国史跡）があり，そこには3.55mに及ぶ忍性塔（国重文）と「延慶3（1310）年」銘の五輪塔（国重文）や，さらにその奥には3.71mの忍公塔という五輪塔があり，出土品もある。



極楽寺の忍性墓

鎌倉の史話50選／㉛

忍性、貧民を救う

浦ちかき山もとにて風いとあらし、山寺のかたはらなれば、のどかにすごくて浪のおと、松の風たえず。

建治三年（一二七七）のこと、極楽寺月影ガ谷に一時住んだ阿仏尼が、鎌倉時代の極楽寺の里の風情を『十六夜日記』に点描した一文である。

当時の鎌倉は相応の賑わいを呈していたはずだが、町の西の郊外にあたる極楽寺地域は、いかにも町はずれの閑地といった感じである。

寺は、現在では鎌倉にのこる唯一の真言律宗の古刹で、奈良西大寺の末。開山は良観房忍性、開基北条重時、正元元年（一二五九）の開創と伝える。

大和国（奈良県）出身の忍性が開山として極楽寺にむかえられたのは文永四年（一二六七）八月、五十一歳のときである。以来、三十七年間にわたり当寺に住し、律の布教をはじめ、精力的に慈善救済事業や土木事業に力をそそいだ。

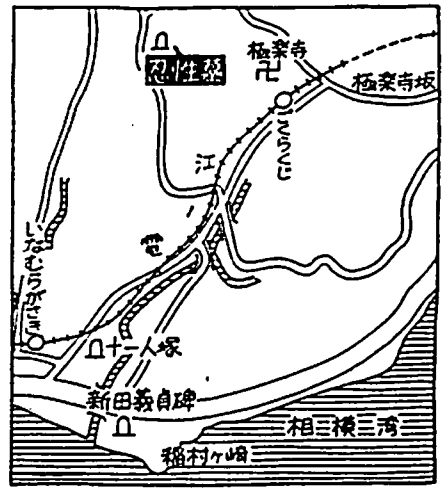
文永九年（一二七二）忍性は、群生を利するため十種の大願を立てた。これによって師の活動の全貌を知ることができる。その二、三を掲げると――、

○病気でないかぎり輿や馬に乗らないこと。

○貧者・乞食・病者・盲人や牛馬の路頭には橋をわたし、水なき所に井戸を掘り、山野には薬草・樹木などを植えること。

○自分に怨害をなし、そしる人にも善友の思いをなし、済度の方便とすること。

などといったもので、最後に「以上修するところの願行功徳に、もし勝利あらば一分もわが身にとどめることなく、ことごとく十方界の衆生に施与すること」と結んでいる。



たまたま、文永十一年の飢饉のときには、難民を大仏ガ谷にあつめ五十余日にわたって粥をほどこした。そして大願にいう具体的な救済施設として施薬悲田院・施益院・療病院・薬湯室などを次々と建てている。

弘安十年（一二八七）極楽寺の金堂供養が行なわれた頃には、北条時宗の発願のもと、大仏に近い桑ガ谷に療病所を建て、

多くの貧しい人々を救った。このとき忍性はすでに七十一歳になっていた。

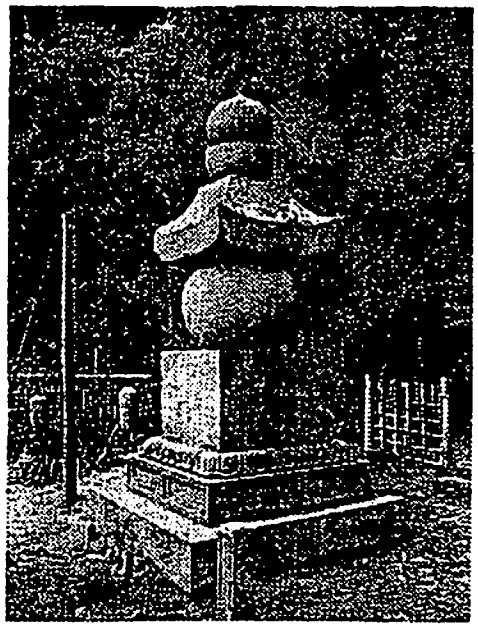
慈善救済の手は、人間にかぎることなく、生きもの全てに情愛の手をさしのべていった。そのあらわれとして、永仁六年（一二九八）牛馬のために馬病舎を設けている。

病人や、多くの貧民の面倒をみるだけでも大変な労苦であったにちがいないのに、動物まで人間同様にあつかった慈悲心・情愛のふかさがしのばれる。忍性が、徳の人・生き仏と称讃されるゆえんであろう。

もちろん、これらはすべて一人の力でなし得るはずはない。師の考えや行為に賛同・帰依し、協力した多くの人々がいたことであろう。開基北条重時との関係から、鎌倉幕府の特別な外護もあったであろう。

が、何といってもやはり忍性にはそれだけの手腕と徳とがそなわっていたからにほかならない。

かく、忍性は、他人のやりたがらない業病患者の診療や貧民に救いの手をさしのべたり、橋を架け、水なき所に井戸を掘ったりして、ひろく社会慈善事業につくしたが、嘉元元年（一三〇三）六月、病床に伏してたたず、ついに七月十二日、極楽寺において入滅した。ときに八十七歳。『本朝高僧伝』には師の業績をまとめて「度するところの弟子二七四〇余人、寺院に結界すること七九ケ所、伽藍の修営八三ケ所、道路の修築七一ケ所、井を掘ること三三ケ所、殺生禁断六三ケ所、浴室・療病所・乞食屋を設置することおのおの五ケ所、乞食に施した布衣三万三千領、その他は記するにいとまあらず」と伝えている。



忍性の墓（鎌倉市極楽寺）

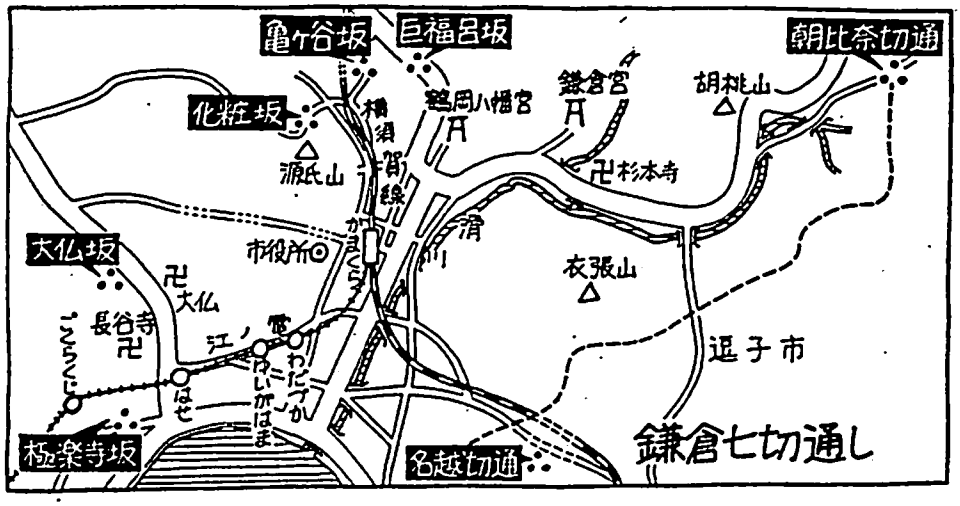
こうした忍性の業績を物語る重要な遺跡が、師の入滅直後に造営されたとみられる総高三百五十七・二㌢の堂々たる石造五輪塔の墓である。

塔は国指定重文。昭和五十一年十一月に修理のため解体工事が行なわれた際、地輪内部から、忍性と当寺住僧賢明房慈済のそれぞれ銘文を刻んだ舎利器が発見されている。

忍性のそれには「嘉元元年十一月日、付法住持沙門栄真」とあるから、師が入滅して四カ月後に当寺二世栄真代に造られたことがわかる。

そして貧民を救った面影の一端を物語る遺品が、本堂前にある鎌倉期の大きな石造千服茶臼とひき臼である。

（三浦勝男）



極楽寺坂は忍性が切り開いたとされているが、それより後の正応二年（一二八九）に鎌倉へ来た『問はず語り』の作者後深草院二条は、七里ガ浜からすぐ極楽寺に詣で、それから化粧坂を越えて鎌倉へ入ったと記している。極楽寺坂を通ったとは書いていない。

極楽寺から化粧坂へ出たとすれば、山の尾根伝いに行くか、あるいは大仏坂からいったん深沢へ降りて、そこから改めて化粧坂へ登って行くしかないだろう。いずれにしても女の足には難渋なことだったと思える。とすれば、彼女が来た時は、極楽寺坂はまだほんの山径にしか過ぎなかったのかも知れない。

坂の西口に近く、庚申塔の立つ狭い石段を北へ登って行くと小さな墓地へ出る。そこは向かい側の成就院とちょうど同じ高さになる。この墓場から東の方へ崖の中腹を伝って行く径があるが、それもやがて消えている。この径などが、切通し以前の径の一つだったのだ。

江の電が極楽寺へ延びて来たのは明治三十七年のことだが、それ以前、明治二十八年頃の写生図を見ると、極楽寺の門前から切通しが峠までよく見通せたようである。とにかく、この切通しは幾度か切り下げられた。少なくとも成就院へ登って行く階段の高さだけは削られたものだ。その削った土を運ぶため、坂ノ下海岸から滑川口までトロッコの線路ができ、上河原の埋立に使われた。

成就院の裏山に「人柳（ひとやぎ）」と呼ばれる窪地がある。この切通しを死守して遂に新田の軍勢を拒みきった北条軍が、補強の軍兵を待機させた場所という。この坂の血まみれの歴史を語る伝承の跡は、草に埋もれ、訪ねる人もない。

鎌倉最後の日

巻十

六波羅滅亡に呼応するかのように、関東では新田義貞が反幕の兵をあげ、事態は急転回する。幕府側もこれを迎え撃つために出陣し、小手差原・分倍河原で両軍の力戦が展開される。小手差原で勝利を得た義貞も分倍河原では危うく大敗を喫しそうになるが、三浦義勝らの助力を得て危機を切りぬけ、相手方を圧倒して鎌倉に迫ってきた。

新田勢を迎えた鎌倉勢は軍勢を三手に分け、仮粧坂、極楽寺の切通、洲崎を固めた。その中で最初に崩れたのは洲崎の守りであったが、大将赤橋相模守（守時）は侍大将南条高直にこう言った。

「勝敗は時のならい、一度の敗北で北条家の命運が尽きるとも思わないが、自分はこの陣頭で腹を切ろうと思う。なぜなら、わが妹が足利高氏の妻になっているからだ。北条高時殿はじめ一門の人々にとかく思われることがあっては武士たるものの恥辱である。疑いをかけられては、しばらくでも命を長らえるべきではない」

と、戦い半ばに自害すると、南条もこれに続いて切腹し、以下九十余人が折重なって自害し果てた。

かと思えば、大仏貞直の家臣の本間山城左衛門のように、日頃主人の不興を蒙って出仕を止められていながら、新田側の一方の大将大館宗氏の首を挙げて貞直の陣に駆けつけ、

「これで多年の御恩報じができました。勘気を蒙ったままで死ぬのは残念でしたが、これで心安らかに冥途の御先立ができます」

と言って切腹したものもいる。

その主人の貞直も、極楽寺の切通を守って奮戦したが、いよいよ手勢も残り少なになった。

御霊神社から極楽寺坂の道に出て，少し行くと，鎌倉十井の一つの星の井と呼ばれる井戸がある。この井戸は星月夜の井とか星月の井ともいわれ，昼間でも星影が見えたことからその名がつけられたといわれている。

星の井の前の石段を上ると虚空蔵堂がある。大空を掌る仏の虚空菩薩を祀る堂で，行基がここで虚空蔵求聞持の法を修行しているとき，星の井から黒光の石をひろい，その石で虚空蔵菩薩像を彫って安置したところだと伝えている。星の井と虚空蔵の伝説はつきもので，両者はおなじ場所に置かれているのである。虚空蔵堂を管理しているのは道路をへだてた向いの丘に建っている成就院（真言宗）である。成就院は空海の伝説の地に，1219（承久元）年，北条泰時が北条氏の武運を祈願して建立したといわれ，のちに極楽寺の子院になったようである。門前の坂道はアジサイが並び，山門を入ると右横に最近建立された弘法大師修行の像が立っている。本堂は公開されていないが，本尊の不動明王像をはじめ千手観音像や文覚上人の荒行像などが安置されている。

成就院の下には極楽寺坂の坂道がつづいている。極楽寺坂は極楽寺の忍性が鎌倉と腰越・片瀬へ通じる道として，1259（正元元）年に開いた切通しといわれる。この切通しが開かれる以前は山の尾根をまわり道をしていくか，海岸の崖ぶちを通っていったので交通に不便であった。鎌倉時代の切り通しは現在の坂より上にあって，成就院の山門の前あたりを通っていたといわれている。

極楽寺坂をおり，江ノ電が下を通る桜橋の手前で，左側の人家のわきの細い小道を入ると，人家の裏に上杉憲方の墓と伝える所がある。憲方は室町前期に関東管領となった山ノ内上杉氏の祖で，明月院を開いて，そこにも墓がある。墓石は安山岩製の七層塔で，塔身に金剛界四仏を刻み，鎌倉末期頃の作とみられる。そばに数基の層塔や五輪塔もある。坂道の反対側の人家の中には立ち入りはできないが，「永和5（1379）年」銘をもつ上杉憲方の生前に建てられた宝篋印塔や五輪塔があり，このあたりは西方寺跡といわれている。

しかし、郎従たちが今はこれまでと切腹したのを見ると大声をあげて罵った。
「日本一の不覚者めが！　千騎が一騎になるまで敵と戦うのが勇士の本分ではないか。さあ、もう一戦、行くのだ」
二百余騎を従え、六千余の敵の中に駆け入り、斬りまくって出てくると、手勢は六十余騎になっていた。貞直はこの手勢もろとも義貞軍の副将、脇屋義助の陣になだれこんで壮烈な戦死をとげた。
同じく鎌倉方の重臣、長崎思元も極楽寺口を守っていたが、新田勢が別の攻め口から市内になだれこんだ気配に気づき、手勢六百余騎を割いて息子の為基と手分けして、その方面の敵に当ることになった。これが今生の別れになるかと思って、さすがに為基が涙をうかべ、行きもやらずにいると、思元は彼をきっと見据え、
「なにが名残惜しいものか。一人は死に、一人は生き残るのだったら再会の期は先のことになろうが、誰も彼もが今日のうちに討死して明日は冥途で会えるのだ。すれば一夜の別れ、なんでそれほど悲しいことがあろう」
と高らかに言ってのけた。

太平記―古典を訪ね―永井路子氏より

御霊神社

▶鎌倉市坂ノ下〈→地 p. 87〉
▶横須賀線鎌倉駅江ノ電長谷駅下車5分

収玄寺の北側の横の道を西にむかい，左折してまもなく右側の細い道を行くと御霊神社がある。御霊神社は先祖を祀る神社のことで各地にその名があるが，ここは鎌倉権五郎景正を祀っている。景正は後三年の役（1083～87年）に16歳で源義家に従い，鳥海の合戦で右の眼を射られながらも，その矢を抜かずに敵を討ち取って武名をとどろかした。この景正の武勇伝が東国武士の意気を示したものとして語りつがれていったのである。景正を祀った御霊神社は村岡・梶原にもあるが，村岡の御霊神社が景正の邸跡といわれていることから，それが本社と見られ，そこから坂ノ下の御霊神社に勧進されたものと思われる。鎌倉時代の記録には坂ノ下の御霊神社の名が記されているので，鎌倉時代の初めには勧進されていたのであろう。社殿の付近には，景正の武勇を伝える手玉石・袂石や，景正が領内巡遊のおり，弓を立て休憩したと伝える弓立の松がある。社殿の前の階段下の右手には宝物館があり，面掛行列に使われていた江戸時代の仮面が保存されている。仮面のうちの福禄寿は鎌倉・江ノ島七福神の一つに数えられている。

御霊神社

境内には石上神社・地神社・金比羅社・秋葉神社・祖霊社などの諸社が祀られている。石上神社は海を祀る神で，海中より引き上げたという巨石を御神体としており，毎年7月20日に御供流しといわれる海の祭が行なわれている。

◉鎌倉時代の由比ヵ浜　鎌倉は三方が山で囲まれ，一方が海という世界でも数少ない海と山に恵まれた古都で，海岸は数々の歴史の舞台となっている。現在滑川を境として西は由比ヵ浜，東は材木座と呼び，西の稲瀬川付近は坂ノ下と細かく分かれるが、もとは由比ヵ浜が海岸の総称だったといわれる。鎌倉時代には，由比ヵ浜（浦）は前浜とも呼ばれた。1182（寿永元）年には工藤祐経が勧めて，源頼朝の命令ということで，曽我兄弟があやうく斬首されようとしたが，重臣らの命乞いで助けられている。1186（文治２）年には静御前が源義経の男子を出生したため，頼朝の命令で安達三郎が，由比ヵ浦に男子を棄てている。1188（文治４）年頼朝は伊豆山・箱根両権現へ参詣する二所詣の精進として浜辺に出て，家来とともに禊（みそぎ）の浴潮をしており，これが恒例となって以後歴代の将軍は，二所詣には，由比ヵ浦で浴潮を行なっている。由比ヵ浜では放生会（ほうじょうえ）・流鏑馬（やぶさめ）・笠懸（かさがけ）・犬追物（いぬおうもの）・牛追物などがしばしば行なわれ，頼朝以下の将軍がたびたび訪れている。合戦も由比ヵ浜では行なわれており，1180（治承４）年に頼朝が石橋山で敗れたときには，まに合わなかった三浦一族が途中で引返すところで，平家方の畠山重忠と戦っている。また1213（建保元）年の和田義盛の乱には，北条義時に敗れた義盛らは由比ヵ浜に退き，敗死し，浜辺では首実検も行なわれた。1216（建保４）年には，宋人陳和卿（ちんなけい）のすすめもあって，源実朝は，中国の医王山へ参拝しようとして，渡海のための唐船を作らせ，北条義時や大江広元の反対にもかかわらず，翌年船は完成したが，由比ヵ浜は唐船が出入するような海岸ではなかったので，浮べ出すことができず，船はいたずらに砂頭に朽（く）ちてしまった。1223（貞応２）年には『海道記』の著者は，「由比ヵ浜は数百艘の舟が纜（ともづな）を解いて近江の大津のようであり，人家の多いところは伊勢の大淀と変らない」と海岸の賑わいを記し，1232（貞永元）年には和賀江島の築港が行なわれて，ますます海岸はにぎわった。

長谷寺

▶鎌倉市長谷3－11〈→地 p. 87〉
▶横須賀線鎌倉駅江ノ電長谷駅下車3分

甘縄神明社から由比ヵ浜通りにもどり，西にすすんで信号をすぎて，まっすぐ小道に入ると，突き当りが，長谷観音で知られている長谷寺（浄土宗）である。開基は藤原房前，開山は徳道といわれ，736（天平8）年の創建と伝えているが，大和長谷寺の縁起にならったものとみられるので，確実な創建年代は明らかでない。長谷寺の梵鐘（国重文）に「文永元（1264）年」の銘があるので，鎌倉時代には成立して栄えていたことは確かである。本尊の十一面観音は高さ9mをこす巨大なもので，木造の観音では日本最大のものである。足利尊氏・義満や徳川家康らの信仰も伝えられ，坂東三十三観音の第四番札所として知られている。

長谷観音

山門を入ると左側に大黒堂があり，鎌倉・江ノ島七福神の一に数えられている大黒天を祀る。大黒堂の前を通って階段を上ると小さな水子地蔵が多数並んでいる。さらに上ると右手から鐘楼や改築された阿弥陀堂，観音堂と宝物館に経蔵などの建物が並んでいる。阿弥陀堂には，頼朝が42歳の厄除けに建立と伝える厄除阿弥陀といわれる阿弥陀如来像が祀られ，観音堂には本尊の観音菩薩像とその三十三の応現身像などが安置されている。宝物館には「嘉暦元（1326）年」銘の銅造十一面観音懸仏（国重文）や銅造鰐口（県重文）・「長谷寺縁起絵巻」をはじめ，板碑・仏具・版木・宋銭など，数多くの文化財が陳列されている。経蔵には輪蔵と呼ばれる回転式書架に一切経が安置される。海の眺めの良い所には久米正雄胸像もある。大黒堂にもどって左手の庭池をとおっていくと弁財天を祀る弁天堂があり，その裏の山裾の窟には弁財天と十六童子が刻まれている弁天窟がある。

高徳院

▶鎌倉市長谷550〈→地 p. 87〉
▶横須賀線北鎌倉駅江ノ電長谷駅下車7分

光則寺からバス通りにもどって，北へしばらくすすむと右に赤い仁王門があり，ここが鎌倉大仏で知られる高徳院（浄土宗）である。ここの大仏は，正式には阿弥陀如来像（国宝）で，仏身の高さ約11m，耳の長さ約2m，目の長さ1m，周囲35m，重さ約120tといわれる巨大な青銅造で1252（建長4）年に着工された。鋳造にあたった鋳物師については諸説があるが，当時鋳物師として活躍していた丹治久友，物部重光・季重，大野五郎右衛門らの何人かが携わっていたとみられている。大仏造立の計画は頼朝のときにすでにあったといわれるが，実現されなかった。頼朝に仕えた稲多野局は頼朝の志をとげようとして木造の大仏造営を計画し，北条政子の助力をえて，僧浄光に勧進させ，1238（暦仁元）年に着工し，6年のちの1243（寛元元）年に完成させたという。この木造の大仏も周囲8丈（約24m）の仏頭をもつ巨大なものであった。しかし，この大仏は何かの理由で撤去されたようで，10年のちに現在の青銅造の大仏が造営されたのである。この青銅仏の完成は明らかでないが，十数年の歳月がかかったとみられている。大仏は現在地の清浄泉寺（真言宗）の寺地に造立され，大仏と一緒に建てられた大仏殿とともに支院の高徳院が管理した。高徳院の別当には極楽寺の忍性が兼務したこともあり，はじめ真言律宗系の僧侶が任ぜられたようであったが，室町時代に入って建長寺の支配下に移った。

大仏殿は地震や大風で破損や倒壊がたびたびあったようで，『太平記』には1335（建武2）年北条時行の兵が大風を避けて堂内に入ったが，堂が倒れて500人の死者がでたと記されてある。また1369（応安2）年にも大風で崩壊し，さらに1495（明応4）年の津波で大仏殿を失い，礎石だけが残った。江戸時代の1712（正徳2）年に江戸の増上寺の祐天上人が江戸の豪商野島新左衛門の後援で，大仏殿再興を志したが，高徳院の別当坊だけが建てられただけにすぎなかった。しかし，このとき大仏を修理し，廃寺となっていた清浄泉寺を復興し，宗派も浄土宗に改め，光明寺の末寺とした。明治の初めに大仏殿再建計画が起きたが実現しなかった。大仏はいまでもうしろの山の後光山を背にして露座のまま鎮座している。

大仏の前には野島新左衛門が寄進した香炉が備えてあり，大仏の腹中には頼朝の護持仏といわれる仏像や祐天上人の像が安置されている。大仏のうしろの4枚の蓮弁には祐天上人のときの大仏修理の奉加人の名が彫られている。大仏の右手の回廊には，約2.8mの大

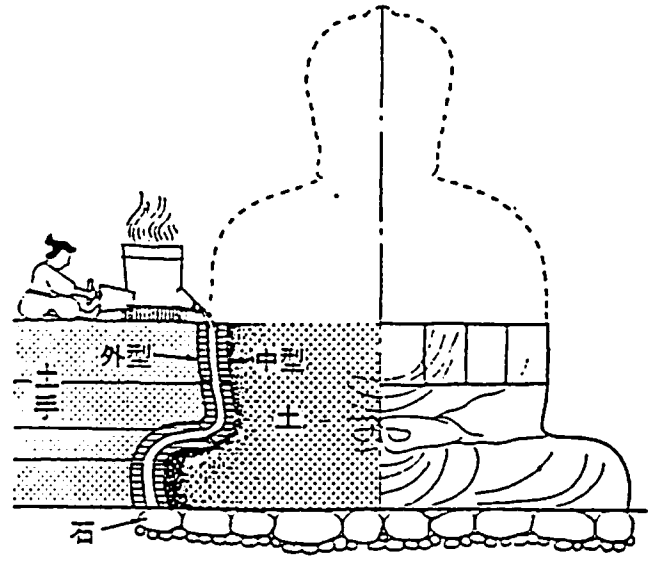
わらじが飾られているが，茨城県の児童が寄進したものである。境内の奥にはもとは朝鮮李王朝の月宮殿であった観月堂があり，堂内に徳川秀忠の念持仏と伝える聖観音が安置されている。観月堂のわきには与謝野晶子が詠んだ「かまくらやみほとけなれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな」の歌碑が立っている。

大仏の法量比較

	鎌倉大仏	奈良大仏
像高	1238cm	1491cm
頂一顎	399〃	541〃
髪際一顎	256〃	321〃
面幅	287〃	
面奥	343〃	
肩幅	858〃	
膝高	185〃	214〃
膝張	1073〃	1229〃
膝奥	914〃	1051〃
重量	120トン	不明

大仏の成分比較

	鎌倉大仏	奈良大仏	
		上野氏測定	岡田氏測定
銅	68.76	91.60	91.77
錫	9.26	2.46	1.38
鉛	19.58	1.61	1.55
鉄	0.04	0.37	1.55



鎌倉大仏鋳造方法の図

消防署横の道をまっすぐ行くと，長谷の鎮守で，天照大神を祀る甘縄神明社がある。この神社は行基が草創し，この地方の豪族染屋時忠が山上に神明宮を建てたとのいい伝えがあり，鎌倉の古い神社の一つである。この神社の御神体が源義家の守り神といわれ，源氏とのかかわりは早くからあった。鎌倉時代には頼朝や政子・実朝らがたびたび参拝しており，御家人の安達盛長が守護にあたるなど幕府からふかい尊信をうけていた。現在神社の鳥居を入ったところは安達盛長邸跡といわれてその石碑が立ち，頼朝挙兵以来の鎌倉幕府の重臣安達氏の屋敷跡と伝えている。最近この場所の東側で発掘された武家屋敷の遺構は安達泰盛館のものであろうといわれている。安達氏の屋敷には頼朝をはじめ代々の将軍が甘縄神明社に参詣したおりに宿泊するほどであった。さきの松下禅尼や北条時宗・貞時・高時らの夫人たちは安達氏の出であり，安達氏と幕府との関係が親密であったことがうかがわれる。

甘縄神明社の東側は，北条政子が頼朝の菩提をとむらうために建てた長楽寺の跡で，のち安養院に移されている。

如来部の仏像

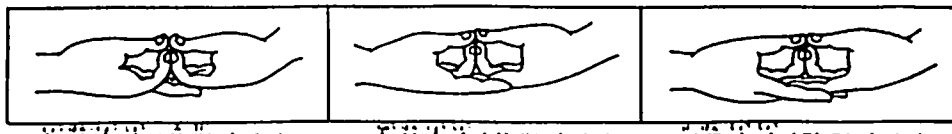
如来とは悟りを開いた覚者をいう。歴史的存在としての釈迦（ブッダ〈仏陀〉）がそれであるが，如来の語が如（真理）によって来生した者という意味であるように，やがていろいろの覚者が考えられるようになった。

＜阿弥陀如来＞ 阿弥陀如来は無量寿如来・無量光如来と漢訳される。それは，梵語の Amita が量ることのできない（無量・無限）という意味で，阿弥陀如来は寿命無量，光明無碍の仏だからである。

無量寿経によると，阿弥陀如来も釈迦と同じくインドの王族の太子で，出家ののち法蔵菩薩となった。そのとき48の願をおこし，その大願を成就して仏となり，西方極楽浄土の教主になったという。四十八願のうち第18願の念仏往生願は，もっとも大切なので，弥陀の本願というが，念仏を行なう者は必ず往生させるという誓いである。大乗教典成立の初めのころからあった阿弥陀信仰が，日本の藤原時代にさかんになったのは，世が末法にはいったと信じる人びとが，今もなお西方浄土で教えを説く阿弥陀仏にすがって極楽に往生したいと希求したからであろう。

左に示したのは仏師定朝作の阿弥陀如来坐像であるが，その印相に注意しよう。

飛鳥～奈良時代の阿弥陀像は禅定印か説法を示す転法輪印であった。それが藤原時代からは，このような印を結んだ形がふつうとなったのである。



上品上生（弥陀定印）　中品上生（弥陀定印）　下品上生（弥陀定印）

♣鎌倉の史話50選／㉗

鎌倉大仏の建立

かまくらやみほとけなれど釈迦牟尼は
美男におわす夏木立かな

いかにも女性らしい感覚でとらえ、歌いあげた与謝野晶子の歌である。しかし、像は西方極楽浄土の教主であるから、眉中の釈迦牟尼は阿弥陀仏に訂正されねばなるまい。

寺は高徳院浄土宗の古刹で、山号は大異山。大仏（阿弥陀如来坐像）は高徳院の本尊であって〝鎌倉大仏〟というのは通称である。

開山・開基は未詳だが、寺蔵の『鎌倉大仏縁起』によると、当寺域は初め聖武天皇が天平九年（七三七）三月、染屋太郎時忠が奉行となり行基が開いた東国の総国分寺跡だと伝える。

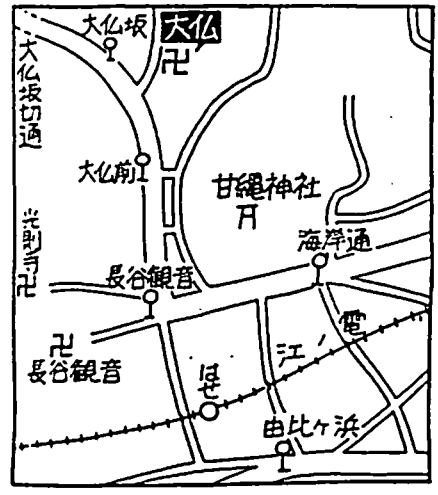
ついで深沢の里に大仏が建立された由縁は源頼朝の発願にあったとする。ただ、彼の生前に出来なかったので、頼朝に仕えていた稲多野局なる老女が成就させたと伝える。北条政子も将軍頼経もおおいに助力したといい、のちには重源の高弟といわれる浄光を鎌倉に招き、勧進聖人として諸国に縁をつのらせた。かくして暦仁元年（一二三八）三月、木造の大仏と大仏殿とが造り始められ、寛元元年（一二四三）その供養がとり行なわれたのである――と。

これに対し、『吾妻鏡』などの史料がつたえる大仏建立のいきさつはどうであろうか。

縁起が語るように、鎌倉深沢の里に大仏堂が造り始められたのは暦仁元年三月のことである。ときの将軍は藤原頼経、執権は北条泰時。頼朝が死んですでに三十九年の歳月が流れていた。造営を企てたのは勧進僧浄光で、仁治二年（一二四一）三月に大仏殿の上棟祝いを執行、二年後の寛元元年六月には待望の大仏開眼供養が営まれて、ここに名実ともに木造の〝鎌倉大仏〟が誕生したわけである。

浄光が都鄙に勧進すること六年、尊卑のへだてなく喜捨された浄財が大きな原動力となり、東国のものふの府に西方極楽浄土の教主を生んだのであった。

では、大仏はなぜ建立されたのか。この問には、さまざまな答が用意されては



きた。浄土信仰および東国政治権力のシンボルであったとするのも一つの見解である。造立にさいし幕府の強い支援があったことは確かであるから、大仏建立は施政および信仰上の柱となり得たと思われるし、ひいては東国政治権力の象徴ともみなされたといえよう。

ただし、大仏建立の理由にはもう一つの要素があったと考えられる。きわめて熱心な浄土信仰者であった北条泰時との関係からみると、直接の発願者は浄光としても、造立とその援助を決断したのは執権泰時だということである。

大仏堂事始の六年前、貞永元年（一二三二）に往阿弥陀仏なる僧が和賀江築島を幕府に申請し、これを泰時が認めているケースと、ほぼ同じであった。

大仏が完成し、開眼供養が行なわれたのは寛元元年（一二四三）六月十六日　奇しくも泰時の一周忌を期しての慶事であった。

当時の浄土宗は法然の出現があったとはいえ、まだまだ死者の追善儀礼としての性格が濃くのこっていて、阿弥陀仏像などの造立時期や目的が、わりと故人の忌斎のときにつくられ、その冥福を祈っている例が多かった。つまり、木造の大仏建立は大檀那泰時が没したため、急遽、かれの一周忌に間にあわせるように造営されたと考えられるのである。

苦心のすえ造立された鎌倉大仏であったが、木像として

鎌倉大仏（鎌倉市長谷）

の寿命は短かった。落慶供養が終ってから九年後の建長四年八月、同じ深沢の里に金銅如来像の鋳造が始められたのである。

このとき造られた像が現在の鎌倉大仏であろうが、木像から金銅仏に造替された理由はわからない。災害のためとか、木像は金銅仏を造るための原型にすぎなかった等の説があるが、果してどうであろうか。

金銅仏の完成年時は不明だが、たぶん、ときの執権北条時頼の強力な支援により短期間で造立されたとみられる。鋳造にたずさわった仏師も多く数えたことであろう。寺伝では丹治久友や大野五郎右衛門の名をあげるが、中でも久友が名高い。

室町期には大仏殿が失われ、大仏は露坐になっていた。堂の再建は明治期にも企図されたが、挫折した。やはり鎌倉大仏は鎌倉の緑を借景にして露坐が似合うようである。

（三浦勝男）

♣鎌倉の史話50選／㊱

安達一族の滅亡

現代の企業にもあてはまることだが、二代目社長が若すぎて飾りものの場合、社内の実力派がいろいろと暗躍して実権をにぎろうとするのはテレビドラマだけではない。鎌倉時代後半の幕府内でも同じである。

九代目社長（執権）に就任した貞時はわずかに十四歳（現代ではそんなことはあり得ないが）、そこで一族から極楽寺業時が副社長（連署）に選出されて、貞時社長を後見することになったが、実は以前から社長家の財産を管理し、社内の管理部門（総務、計理、人事他）に成績をあげていた専務取締役平頼綱と、営業部門を一手ににぎり、社長の外戚でもある専務取締役安達泰盛の二専務が、新参の副社長のいうことを一向に聞こうとしない。そしてそれぞれがしのぎを削って社内抗争をはじめたのである。

つまり北条氏の私領をとりしきる内管領平頼綱が、執権と身近な自分の立場を利用して、御家人たちの人事に、賞罰に、果ては政治にまで口をはさむに至った。しかも北条氏の御内人と称し、その他の御家人を外様といって壁を距てて対している。貞時の乳母にしてからが頼綱の娘なのである。

しかし一方の安達泰盛は、頼朝が蛭ガ小島の流人生活時代から忠実に仕えた安達藤九郎盛長の子孫である。そして以後、景盛、義景、泰盛とつづいて、その間に比企、畠山、和田は亡び、梶原、三浦を亡ぼして、今や名実ともに北条氏に並ぶ大族である。むしろ北条氏一門の今日あるは「我が安達一族の協力によるもの」という自負さえある。また北条氏とは代々姻戚関係を結び、泰盛の妹は前執権時宗の室で、縁切り寺として有名になった東慶寺の開基覚山尼である。つまり執権貞時と安達泰盛は甥と伯父の関係になる。しかも安達一族は、幕府評定衆、引付衆という最高要職の三分の一を占めて、たかが内管領ごとき、虎の威をかる狐とばかり鼻息があらい。いわばこの時期、安達一族に並ぶ豪族はなく、もっとも得意の絶頂期であったのだ。これを面白く思わない者は数多い。なかでも内管

領平頼綱にとっては目の上のこぶ。しかし泰盛は武人としても政治家としても評判が高く、中傷すべき余地がない。いつかは手術をしてとり除こうと覚悟をしているところへ、時節は到来した。

もともと泰盛の子宗景には、父の威をたのんで傍若無人の振舞が多かったのだが、ついに「我が曾祖父景盛公は頼朝公の子である」と宣言し、それまでの藤原姓を源姓にかえたのだ。伝説的には藤九郎盛長の妻は比企尼の娘であり、一時流人の頼朝に仕えたという話がある。だからといって、景盛が頼朝の子という理屈には結びつかない。のみならずこうしたごり押しは「安達一族は源姓を名のって将軍職を狙うつもりである」といわれても弁解の余地はない。しかも安達邸（由比ガ浜大通りから甘縄神社へ曲る路次の入口右側附近）には弓や馬、またあぶれ者の武士がすでに集結している様子。ここに於て頼綱は、若き執権貞時に「安達一族に謀叛の用意あり」とひそかに告げた。

安達盛長邸跡（鎌倉市長谷・甘縄神社）

かくて弘安八年（一二八五）十一月五日、泰盛父子が出仕したところを、殿中にかくれていた頼綱の手のものが、どっとかかって二人を殺害し、一隊は甘縄の安達邸を襲ったのである。これは建仁三年（一二〇三）九月二日、北条時政が名越の自邸に比企能員を呼び、その場で殺害した場面とそっくり同じだ。

このあと復讐をおそれる頼綱は、安達氏に関連する御家人すべてを徹底的に探し捉えて処刑した。その数、実に五百余人という。北条一門で金沢文庫を継承した金沢顕時ですら、その妻が泰盛の娘だったために捕えられ、下総国へ流された。

これを世に霜月騒動というが、かくて今や内管領平頼綱におそれる者なし。彼の専横による思いきった恐怖政治がはじまるのである。

しかしおごるものは久しからず。正応六年（一二九三）四月十三日、あたかも政変の前触れのごとく鎌倉は大地震に見舞われ、建長寺以下多くの伽藍が倒壊、二万人の死者があったという。そして余燼さめやらぬ十日後、二十三歳になった執権貞時は、頼綱邸を急襲し、頼綱と長子宗綱を殺害、次子助宗を捕えてこれを佐渡へ追放。

鎌倉にはもはや北条氏の足もとを脅かすものは何もなくなったのだが、それから三十年後には北条氏一門が、泡沫のごとく鎌倉から抹殺されるのである。

（今野信雄）

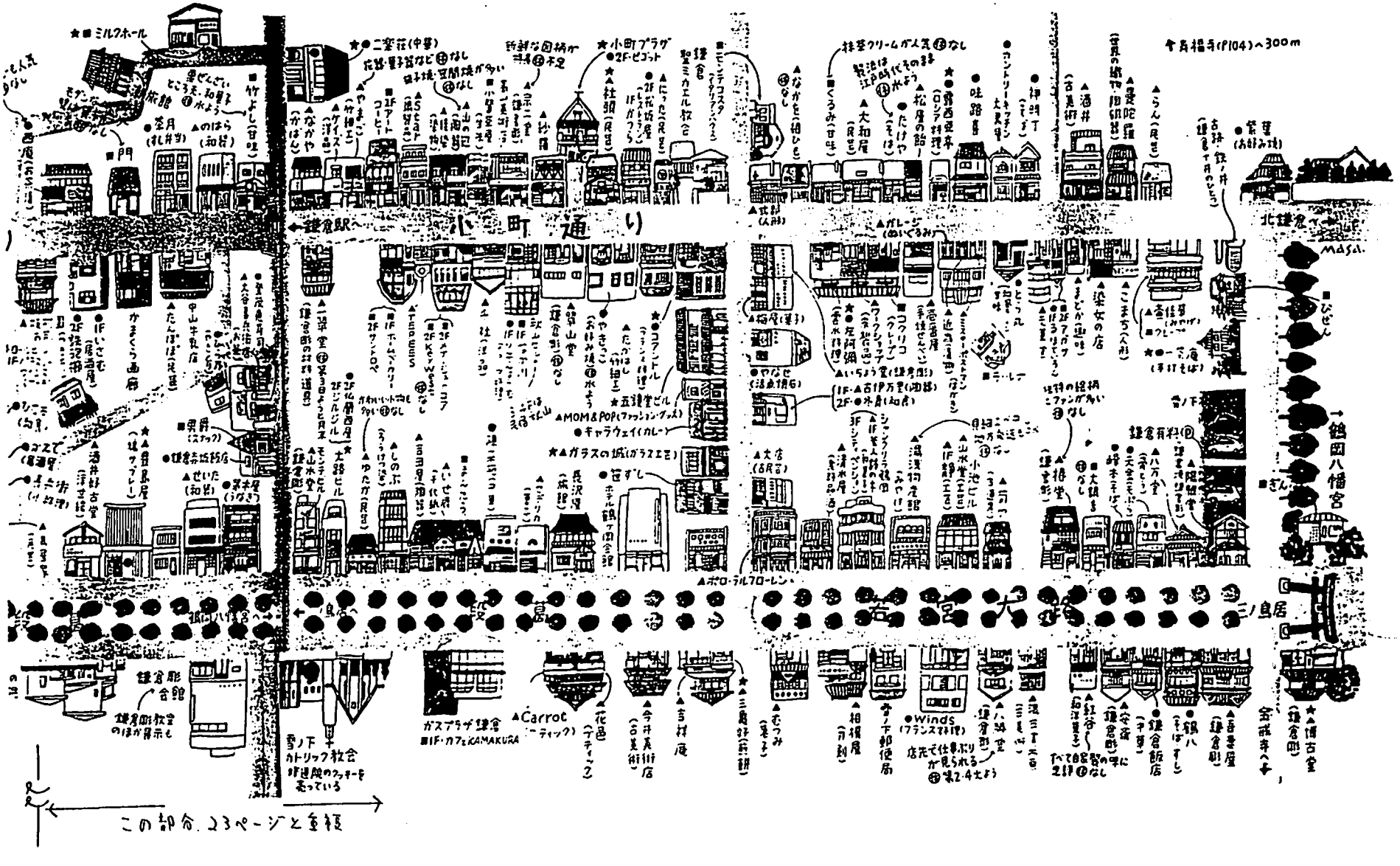
鎌倉文學館

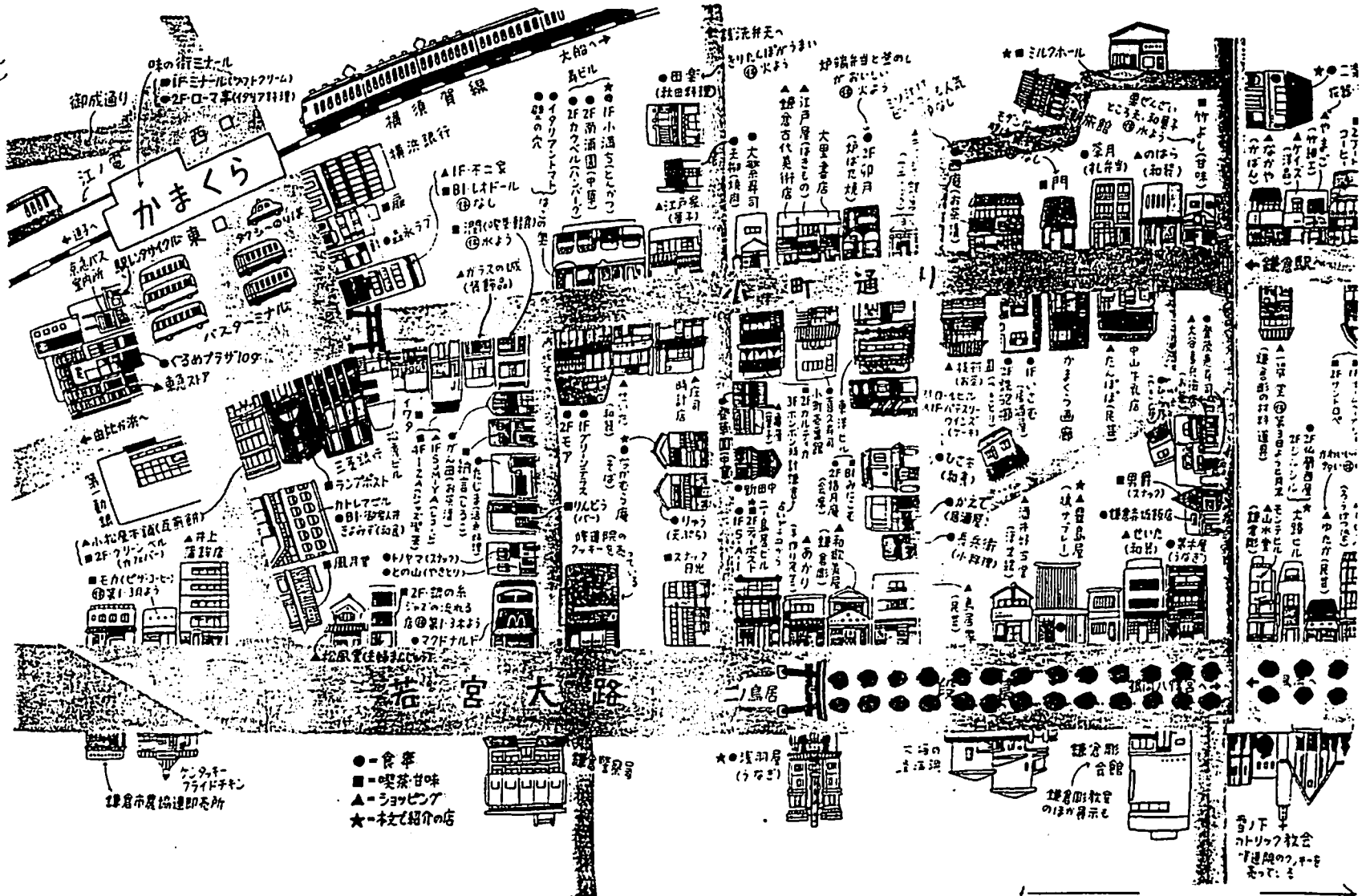
この文学館は、加賀百万石の藩主で知られた、旧前田侯爵家の鎌倉別邸でした。この別邸は、第15代当主前田利嗣氏が、明治23年頃に土地を入手して建てたのが始まりで、現在の建物は、第16代当主利為氏が、昭和11年に洋風に全面改築したもので、設計者は渡辺栄治氏、工事施工は竹中工務店でした。

建築用材は塩害に強いチーク材を使用、室内のステンドグラスや照明器具なども粋をこらしています。

明治時代には、当時皇太子であった大正天皇ほか皇族の人々が来遊しており、戦後にはデンマーク公使が別荘に借用し、昭和39年からは佐藤栄作元首相が借りて、亡くなる前まで週末の静養地としていました。この間、吉田茂元首相も数回ここを訪れ、また、作家の三島由紀夫氏も作品「春の雪」の中の別荘のモデルとして描いていることでも知られています。

昭和58年に第17代当主利建氏より本館建物を鎌倉市に寄贈されたので、外観をそのまま残しながら、内部を補修し、別棟に収蔵庫を新築して、昭和60年10月31日開館し、11月1日より一般公開しました。


小町通り
鎌倉駅へ
北鎌倉へ
鶴岡八幡宮
大鳥居
二の鳥居
三の鳥居
雪ノ下
ミルクホール
二楽荘(中華)
小町プラザ
2F.ビゴット
鎌倉ミカエル教会
松屋の飴
大和屋
たけや
酒井
ひぜん
ぎん
鎌倉彫会館
鎌倉彫教室のほが展示も
ガスプラザ鎌倉
カトリック教会
Carrot
花色
今井美術店
吉祥庵
三島好(鎌倉彫)
むつみ
相模屋
雪ノ下郵便局
Winds
八幡堂
紅谷
鎌倉飯店
鎌倉彫
吾妻屋
鎌倉彫
鎌八
鎌倉有料
鎌倉古道
この部分、23ページと重複


かまくら
西口
東口
横須賀線
江ノ電
御成通り
味の街ミナール
■1F ミナール(ソフトクリーム)
■2F ローマ亭(イタリア料理)
横浜銀行
■扇
タクシーのりば
■ミルクホール
■竹よし(甘味)
■門
■茶月(弁当)
▲のぼる(和菓子)
▲ながや(かばん)
▲やまご(竹細工)
鎌倉駅へ
大船へ
●イタリアントマト
●鎌の穴
●田舎(料理)
●大寿司
●江戸屋(寿司)
▲鎌倉古代美術店
大里書店
●炉ばた焼
●2F 卯月
●1F 小満(とんかつ)
●2F 南浦園(中華)
●2F カウベル(ハンバーグ)
▲1F ホニ宮
■B1 レオドール
■渋谷(喫茶軽食)
▲ガラスの城(装飾品)
■ミルクホール
■竹よし(甘味)
■茶月(弁当)
▲のぼる(和菓子)
▲ながや(かばん)
▲やまご(竹細工)
鎌倉駅へ
京急バス案内所
JRレンタサイクル
バスターミナル
●くるめプラザ109
▲東急ストア
由比ガ浜へ
第1駐車場
▲小松屋本店(五新舗)
■2F クリーンベル(カフェバー)
▲井上洋服店
■モカ(ピザ・コーヒー)
■カトレアビル
■B1 沙羅(和食)
■ランプポスト
■風月堂
▲ガム屋(おみやげ)
■たじまや(和菓子)
▲トトヤマ(スナック)
●との山(やきとり)
■2F 銀の糸(ジュエリーの流れる店)
●マクドナルド
▲松風堂(はまぐりせんべい)
●2F モア
●1F アリーナテラス
■リルビン(バー)
▲せいた(和菓子)
●つかもう庵(そば)
▲佐司時計店
●リッツ(天ぷら)
■スナック月光
●食堂(中華)
■勅田中
●1F S.A.
●1F 小満(とんかつ)
■2F カルティカ
3F ホンポン(料理)
■東洋ビル
■B1 みたこて
■2F 梅月庵(会席)
▲和歌義屋(鎌倉彫)
▲あかり(ジュエリー)
▲江戸屋(寿司)
●大寿司
●江戸屋(寿司)
▲鎌倉古代美術店
大里書店
●炉ばた焼
●2F 卯月
●1F 小満(とんかつ)
●2F 南浦園(中華)
●2F カウベル(ハンバーグ)
▲1F ホニ宮
■B1 レオドール
■渋谷(喫茶軽食)
▲ガラスの城(装飾品)
■門
▲たんぽぽ(民芸)
中山千代店
かまくら画廊
▲1F 鎌行(お茶)
■2F 鎌倉彫
■1F いこて(喫茶)
▲ひこや(和菓子)
■男爵(スナック)
●鎌倉茶坊主
▲せいた(和菓)
●茶寿屋(うなぎ)
▲かえで(居酒屋)
●長兵衛(小料理)
▲鎌倉彫(民芸)
▲1F 鎌行(お茶)
■2F 鎌倉彫
■1F いこて(喫茶)
▲ひこや(和菓子)
■男爵(スナック)
●鎌倉茶坊主
▲せいた(和菓)
●茶寿屋(うなぎ)
▲かえで(居酒屋)
●長兵衛(小料理)
▲鎌倉彫(民芸)
▲ゆたか(民芸)
鎌倉駅へ
■2F サントロペ
■2F 化粧品屋
▲大路ビル
■2F ランシル
▲山水堂(鎌倉彫)
モンテビル
■2F 鎌倉彫の材料(道具)
▲1F 宝(鎌倉彫の材料(道具))
●1F 宝
■1F サントロペ
■2F 化粧品屋
▲大路ビル
■2F ランシル
▲山水堂(鎌倉彫)
モンテビル
▲ゆたか(民芸)
■

二〇、鎌倉

一、七里が浜のいそ傳ひ、
稲村崎、名将の
鎧投ぜし古戦場。

二、極楽寺坂越え行けば、
長谷観音の堂近く、
露坐の大佛おはします。

三、由比の浜邊を右に見て、
雪の下道通行けば、
八幡宮の鶴社。

四、上るや石のきざはしの
左に高き大いてふ、
同はばや、遠き世世の跡。

五、若宮堂の舞の袖、
しづのをだまきくりかへし
かへしし人をしのびつつ。

六、鎌倉宮にまうでては、
涙きせぬ親王のみうらみに、
悲憤の涙わきぬべし。

七、歴史は長し七百年、
興亡ナベてゆめに似て、
英雄豪はこけむしぬ。

八、建長・圓覚古寺の
山門高き松風に、
昔の昔やこもるらん。

（一九二七年（昭和二年）用字字句を改め小学校教科書）

東海道

一、汽笛一聲新橋を
はや我汽車は離れたり
愛宕の山に入りのころ
月を旅路の友として

二、右は高輪泉岳寺
四十七士の墓どころ

三、雪は消えても消えのこる
名は千載の後までも
窓より近く品川の
蒲場も見えて波白く
海のあなたにうすがすむ
山は上總か房州か

四、梅に名をえし大森を
すぐれば早も川崎の
大師河原は程ちかし

五、急げや電氣の道すぐに
鶴見神奈川あとにして
ゆけば横濱ステーション
港を見れば百舟の
煙は空をこがすまで

六、横須賀ゆきは乗換と
呼ばれておるゝ大船の
つぎは鎌倉鶴が岡
源氏の古跡や尋ね見ん

七、八幡宮の石段に
立てる一木の大鴨脚樹
別當公暁のかくれしと
歴史にあるは此蔭よ

八、こゝに開きし頼朝が
幕府のあとは何かたぞ
松風さむく日は暮れて
こたへぬ石碑は苔あをし

九、北は圓覚建長寺
南は大佛星月夜
片瀬腰越江の島も
たゞ半日の道でかし

大和田建樹作歌、鉄道唱歌

明治・刊

参考図書

○「太平記」ー古典を読むー　永井路子著　〇〇・一〇　文春文庫　文芸春秋社
○太平記紀行　邦光史郎著　九一・四　徳間文庫　徳間書店
○鎌倉大仏　清水真澄著　昭和五四・七　有隣堂
○歴史と旅　特集ー鎌倉の史話５〇選ー　昭和五九・四　秋田書店
○交通公社のポケットガイド１２　鎌倉　昭和六〇・一　日本交通公社
○交通公社のるるぶ情報版　横浜鎌倉湘南　昭和六三・二　日本交通公社
○神奈川県の歴史散歩（下）　八七・五　山川出版社
○定本日本の唱歌　堀内敬三著　昭和四五・八　実業之日本社
○日本教科書体系近代編第２５巻　唱歌　海後宗臣編　昭和四〇・九　講談社
○図説歴史散歩事典　七九・九　山川出版社
○もうひとつの鎌倉ー歴史の風景ー　石井　進著　八三・七　そしえて

エチケット守ってきょう一日をさらに楽しく

◎電車の座席は譲りあって一人でも多く座れるようにご協力ください。

◎道路は郷土研究会の専用道路ではありません。地元の方の生活の邪魔にならないように！

◎史跡めぐりは「団体行動」です。ムードにひたりながら、ゆっくりとお歩きになりたいお気持ちもわかりますが、今日は「みんなのペース」にあわせてください。わがままは歩きは、お友達と次の機会にーー。